

編集後記

『言語文化』第三一号をお届けします。本号も、例年に劣らず多彩な内容を提供していることを望んでいます。

今年の特集は「一九六〇～七〇年代日本映画と世界」のように見られ、語られたか」です。これは、斉藤綾子氏（芸術学科教授）が中心となり企画された二〇一二年十一月十日に行われたシンポジウムに基づくものです。現在「世界各国の研究者たちの注目を一挙に集めている」一九六〇、七〇年代の日本映画は「いったいどのように……世界で受容され、語られてきたのか」、が主題であり、シンポジウムは「北米、欧州、アジア、ラテンアメリカといった大陸を越えた各国から研究者が一同し、一九六〇、七〇年代の日本映画の受容、批評、研究の状況を世界規模で把握、検証する」ものでし

た。特集については、斉藤氏による編集後記をさらにご覧ください。

*

特集以外の寄稿のうち、エリカ・シューハルト氏（ハノーヴァー大学教授・元ドイツ連邦議会議員）による「ペートルヴェン 危機からの創造的飛躍」は、二〇一三年十一月十九日の氏による講演会の記録である。司会は樋口隆一氏（芸術学科教授）であった。

また、エルンスト・ヘルトリヒ氏（ペートルヴェン・アルヒーフ（資料館）所長）による「ペートルヴェンと宗教」は、二〇一二年十二月一日に「ペートルヴェン連続講演会」の一環として、樋口教授司会のもとで行われた講演に基づくものである。

つぎに、小林幸子氏（本研究所周員）は、論考「ワグナー資料の収集家メアリー・バレルとバレル・コレクション」を寄稿された。

森本美恵子氏と末永理恵子氏による

「ルネ・シュメー編曲「春の海」をめぐる」は、昨年に続き、貴重な資料発掘の記録である。両氏は、本学図書館付属の日本近代音楽館の音楽司書である。

生田康夫氏（本研究所周書会講師）も、昨年に引き続き、ホメーロスを主題とした論考「『笑』から見たホメーロス」を寄せてくださった。

最後に富山（英文学科教授）は、アメリカの詩人ゲーリー・スナイダーによる宮沢賢治詩の英訳を論じた英語論文『Miyazawa Kenji and Gary Snyder—An Encounter of Similar Poetics?』を掲載させていただいた。

*

二〇一三年度の本研究所周の活動としては、シューハルト氏の講演会のほかに、牧野理英氏（日本大学准教授）による講演「ハイヒールとジャズ…もう一つの日系アメリカ」が、貞廣真紀氏（英文学科専任講師）の司会により十月二十九日に行われた。

また、高村峰生氏（神戸女学院大学専任講師）による講演「『インセプション』とポストモダン・アーキテクチャーの詩学」が、二〇一四年一月七日に、同じく貞廣真紀氏の司会により行われた。

他方、十二月十四日の芸術学科主催の国際シンポジウム「演劇の核とは何か——ポストドラマ演劇と日本演劇」においては、ハンス・ティース・レーマン氏（フランクフルト大学名誉教授）による特別講演「プレドラマ演劇とポストドラマ演劇」が、当研究所との共催によって実施された。

Liberlit Conference は、Michael Pronko 氏（英文学科教授）と Paul Hullah 氏（同准教授）が中心となり開催してきた、英語教育と文学との関係性を様々な角度から考察する学会であるが、本年度二〇一四年二月十日の第五回会議では、A. Robert Lee 氏（元・日本大学教授）による招待講演「English Department: What's in the Title?」が、当研究所との共催により行われた。

さらに、前年に続き寺本圭祐氏（芸術学科非常勤講師）企画による音楽の催し「ケルティック・クリスマス」が、十二月十六日に開催された。これは第一部「アイルランドの伝統的なダンス（シャノンノース）を体験できるワークショップ」と、第二部「イリアンパイプス、コンサートイナ、アイルリッシュハーブ、ギターによるアイルランドの音楽」により構成されていた。

*

生田氏の寄稿は研究所の公開講座「ホメロス輪読会」の成果に基づくものだが、研究所では一三年度も従来と同様に、「古典ギリシア語」の初級・中級・上級の講座、「記号哲学研究会」、「タイ語講座」、「読む短歌・詠む短歌」といった各種の活動が続けられた。

（富山英俊）

今回特集の一つは、緒言にも指摘されているように、明治学院大学言語文化研究所と文学部芸術学科共催で、二〇一二年一月一〇日に開催された第17回日本映画シンポジウム「1960〜70年代日本映画と世界——どのように見られ、語られたか」（於・明治学院大学白金校舎2102教室）と、翌日十一日に開催された「日本映画ワークショップ」の発表内容を中心に組まれた。

日本映画研究は、日本映画史、作家研究、そして作品批評という三つの大きな柱を中心に発展してきたが、第一に、ここ数十年來特徴的にみられる傾向は、海外における日本映画研究者と日本の研究者との交流であり、第二に、日本映画がどのように外国で見られ、語られてきたかという受容と言説をめぐる研究の充実である。このような流れを生み出す一つのきっかけとなったのは、二〇〇〇年以降にヨーロッパの映画祭で特集上映されるようになった「ATG映画回顧上映」を始めとする大島渚、吉田喜重、若松幸

二、松本俊夫、羽仁進といったニューウエイヴの監督たちの再評価である。

本シンポジウムに参加した各国の研究者たちは、このような動きの中で、それぞれの立場から独自の研究を行いつつも、日本映画史に関する芸術的、産業的、批評的側面を総合的に捉え、かつその中にあって六〇年、七〇年という時代の日本映画を積極的に評価し、世界映画史の中に改めて位置づけようとする。多くが各国で映画上映や特集企画のキュレーターにも関わってきた研究者、批評家たちである。ヨーロッパ、南米アメリカ、中国、韓国の研究者たちがこのように一堂に集まり、六〇〜七〇年代の日本映画について発表するというたぐいまれな機会を持つことができたことの意義を再確認するためにも、今回の特集を組むことができたことを喜びたい。

今回掲載された原稿は、基本的にシンポジウムとワークショップの発表原稿採録であるが、時間の都合上、発表では割愛しなくてはならなかった部分も含めた

完全版である。緒言でも触れているように、すべての発表とワークショップの採録はできなかったが、以下にシンポジウムを中心に簡単にコメントしたい。

シンポジウムの第一部では、日本映画の受容について各国の例を中心に議論された。ATG映画特集やピンク映画映画特集を企画してきたキュレーターとしてヨーロッパを代表する日本映画研究者であるローランド・ドマーニグ氏（現・明治学院大学文学部芸術学科准教授）がドイツ語圏において日本映画の受容がどのようなになされたかを中心に論じた。時には、まったく内容とは異なるセンチシヨナルなポスターなどが作られ、日本映画の受容は日本国内の評価や文脈とは別に独自の展開をしてきたことをさまざまに資料を駆使し、実証的に示した。またオランダやノルウェーで「吉田喜重回顧上映」を企画したデイック・ステゲヴェルンス氏は、オランダにおいて日本映画がどのように受容されたか（あるいはされなかった）について、ある意味ではス

テレオタイプ化された日本のイメージが流通する中でどのように日本映画が紹介されていったかなど、流ちょうな関西弁風の日本語で語られた。フランスのマチユー・カベル氏はフランス映画批評において見られた日本映画の理解と誤解について、言語的な限界も含めて検討した。また、大韓民国を代表するソウルのシネマテークである「ソウルアートシネマ」のキュレーターで映画評論家のキム・ソウク氏は、六〇年代の日本映画が九〇年代のソウルにおいて受容されることの意味を自らの体験を交えながら、時空間を異にしながらも、ある種の映画が持ちうる「同時代性」について考察を行った。第二部では、米国で日本映画研究の第一人者の一人マーク・ノーネス氏が北米における日本映画受容について語ったが、日本映画の受容程度を表す地図がアメリカ政治的地図にも重なり興味深いコメントを残した。カナダで教える英国人のマイケル・レイン氏は六〇年代の大島の映画がどのように七〇年代代表する重要

な映画理論に影響を与えたかを丁寧に検証した。またキューバを代表する日本映画研究者であるハバナ大学のマリオ・ピエドラ氏はキューバにおける「座頭市」人気について、同時代の経験を含めた深い洞察を行った。社会主義国キューバにおける座頭市の人気という思いもがけない邂逅は、当日聴衆として熱心に参加していた学生たちにとっても大きな印象を残したようである。

第三部では、パリ大学で日本映画の教鞭を執っているニコル・ブルネーズ氏（『映画の前衛とは何か』現代思潮新社、二〇一二年）が、政治的前衛映画作家の系譜をたどりながら、足立正生監督の映画を世界映画史に位置づける試みを発表した。発表を受け、監督が自らの映画体験を振り返りながら、なぜ六〇〜七〇年代の日本映画がこのような力を持ちえたのか、受容と言説の中心に、実は映画作家が存在していたことを鮮やかに語った。ワークショップでは、日程の都合上前日の発表ができなかった晏妮氏が、大島

渚の映画が八〇年代の中国映画に与えた意味を振り返り、また若手の研究者たちを中心にアーカイヴなども含めて、現代美術、演劇、ドキュメンタリーとさらに射程を広げて、活発な発表と議論が展開された。

いずれの発表でも、言語・社会文化的な文脈が全く異なる国において日本映画が本来の意味や文脈を時に驚くべきほどに曲解されながらも、その中で、映画のみが持つことのできる映像の力や同時に翻訳（誤訳）の限界をも超えて、新たな意味を付加されていく過程の面白さが明らかにされた。同時に、サムライやゲイシヤなど未だなおハリウッドによって流通されている日本のステレオタイプとは異なる日本の姿を強烈に描いた六〇〜七〇年代の監督たちを再評価するのが、日本語を解し、日本映画を知り、そして現代日本文化を生活・吸収した若い研究者たちだからこそ、今までの作品中心の作家論とは異なる視点で日本映画を見ることを可能にしたのが、鮮やかに浮かび

上がってきた。

諸処の事情で、シンポジウムを特集としてまとめるのを、本号まで待つことになってしまったが、シンポジウムの重要性を改めて認識し、さらなる研究と交流へと発展する一助になれば幸いである。今後とも言語文化研究所と芸術学科が日本映画研究の国際的交流の拠点の一つであり続けるように努力する所存である。

末筆になるが、本研究プロジェクトは、「世界における一九六〇・七〇年代日本映画研究と受容の調査分析」（科学研究費補助金「基盤研究B」）によって、二〇一〇年に開始されたのが、代表者であった本学芸術学科教授だった四方田剛己氏の退職により最終年度の継続が叶わず、シンポジウム開催に深刻な予算的問題が発生したものの、多くの発表者に自身で来日いただくなどの大きな協力を得て可能となった。

シンポジウムとワークショップの発表者の皆さん、ディスカッサントの方たち、素晴らしいトークを今回改めて講演とし

てまとめてくださった足立監督、通訳や
翻訳の方たち、また研究所の深沢比呂子
さん、芸術学科の教学補佐、そしてシン
ポジウム進行を助けてくれ、聴衆として
も参加した本学大学院生・学部学生たち
にこの場を借りて、改めてお礼を申し上
げたい。シンポジウムをまとめ、本特集
も中心になって編纂してくれたのは平沢
剛氏である。感謝したい。

(斉藤綾子)